

# 「チョコマシュと友だちとぼくわたし」物語

## ～教室内飼育活動を軸とした学びの広がりと深まり～

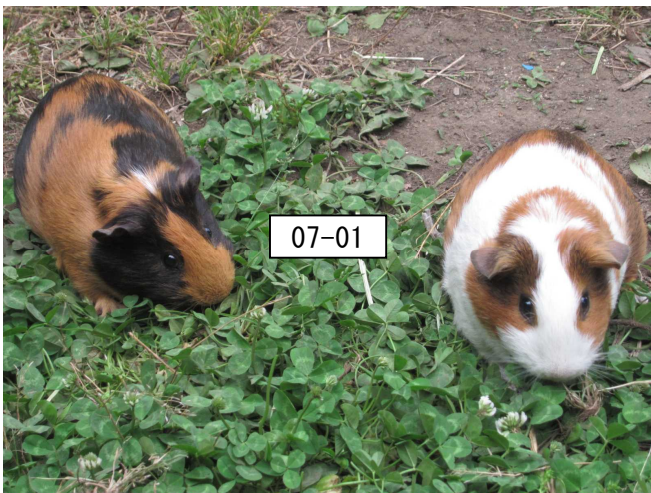
加藤 直子

### 1 はじめに

学校には、子どもたちの興味関心を寄せるものがたくさんある。ありすぎるほどである。その中で生きものへの興味関心は大きい。しかし、興味関心や愛着が大きいだけに生きものに対して自己中心的な言動が見られる。本学級でも、バッタを物のように扱った会話がなされていた。その会話が聞こえたときは正直「なんだその言い方は！」と思ったが、バッタへのおもいがあるってこそその言葉だろうとも考え、ここが飼育授業を創り出していくタイミングだととらえた。子どもたちの生きものへのおもいや願いを大切にしながら、教師の手立てをタイミング、方法を考えて行うことができれば、この会話から変容していくはずと考え。それが、「チョコマシュと友だちとぼくわたし」物語の始まりである。

### 2 教室内飼育活動の実践

#### (1) なぜモルモットの飼育なのか



- 子どもがかわいいと感じやすい→愛着を持ちやすい
- 比較的おとなしく噛んだりすることが少ない（動物園の飼育員さんのお話より）
- あたたかさを感じることができる→体温を感じいのちのぬくもりを感じることができる
- 鼓動を感じることができる→自分たちと同じく生きていることを感じることができる
- 体の成長に気付きやすい（生まれて2か月ほど300グラム弱 現在1,000グラム以上）

- 長期にわたって飼育することで感性がゆさぶられる場面が数多く生まれる
- 繰り返し関わる過程で生まれる「もっと元気に育ててほしい」「もっと仲良くなりたい」という願いを実現させるために育て方に関心を持つ
- モルモットの幸せを考え行動する自分の成長に気付くことができる
- みんなで知恵を出し合い問題を解決しみんなで育てているという一体感をもつことができる

#### (2) モルモットとの出会い

横浜市にある野毛山動物園をモルモットとの出会いの場とした。野毛山動物園の飼育員さんと連絡をとり、子どもたちにモルモットを飼育するうえでの心構えや考えることをお話していただくこととした。

飼育員さんは「クラスみんなで育てるということは、みんながだっこできなければいけないよ」「だっこできるようになるには、勇気を出してね。動物は怖がっていると余計に怖がってしまうからね。」「とにかく自分勝手なことをしたり、自分中心に考えていては、モルモットさんは死んでしまうよ。我慢する力をつけなければいけないよ。そして、どうしたらモルモットさんがハッピーになれるのか、モルモットさんの気持ちになって考えてみてね。」ということであった。「勇気」「我慢する力」「相手（モルモットさん）の気持ちになって考える」ということを教わった。これらは、子どもたちに必要な力そのものであった。

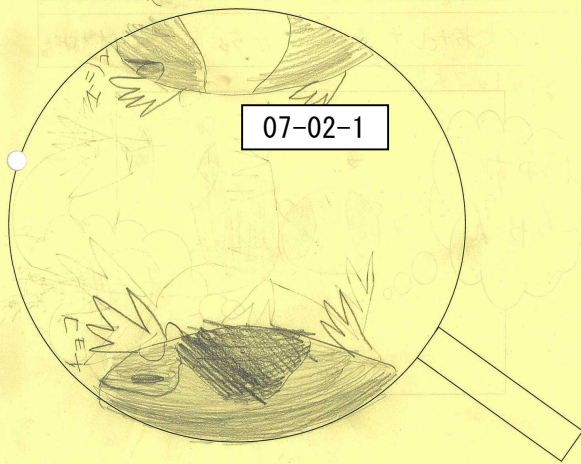
プロの言葉は必ず子どもの心をゆさぶる。本物のモルモットに触れたことも合わさって、子どもたちが「モルモットを育ててみたい」「モルモットが飼えるように調べたり考えたりしていきたい」という意欲を大きくさせた。

#### (3) 観察カードではない表現の一方法

「モルモットさんから自分へ」「自分からモルモットさんへ」という双方向のお手紙を書き、どちらにもなりきれるのは、低学年だからこそできる表現活動だと考える。繰り返し取り組ん

チョコマシュからのおてがみ

3くみのきょうしつにきて200日きねん日です。  
 ゆす<sup>カ</sup>ちゃんのお気に入りはこちらでしょ。  
 あたししてるよそれはだいいてるときに  
 小さなつめであちないようにしか  
 みついているところでしょ？  
 300日になったら大きいつめになるかな



あとゆす<sup>カ</sup>ちゃん目もすきだよね。  
 ふたりとも目がキラキラしてて、く  
 りくりしてるところでしょ？でも  
 口もすきだよね？おさをたべると  
 とき小さい口がうごいてるところがす  
 きだよね。あとなきごえもすきでね。  
 あたしたちこそまじまじと見て  
 いるよあたしたちもゆす<sup>カ</sup>ちゃんのこと大好きだよ  
 マシュチョコより

07-02-2



でいくことで、モルモットへの温かいおもいやモルモットへの細かいところの気づきも生まれてきた。また、モルモットの気持ちになって書いたお手紙に対する返事には、子どもたちのモルモットへの思いがあふれるように書き込まれている。モルモットの気持ちになって書いたお手紙と重複している内容も多いが、繰り返し書くことでモルモットへの思いを大きなものにしていく。

(4)モルモットを育てる心構えの変容

お手紙というのは、さまざまな立場から書いてもらい読むことができる。ある時は、おうちの人から子どもたちへお手紙を書いていただいた。この時は、モルモットのうんちやおしっこをそうじするのが大変でケージを見ても見ぬふりしたりしている問題が起こっていた時だった。子どもたちがモルモットと同じく自分では身の回りのお世話ができない赤ちゃんの頃、どんな気持ちでお世話をされていたか、お手紙を読むことでお世話をする側の気持ちを知ることができた。自分がどのように育てられたかを知ることによって、モルモットをお世話する自分の心構えを見つめ直すことができた。おうちの人へのお返事には、以下のようなことが書かれていた。

- わたしが赤ちゃんのときお母さんやお父さんもたいへんだったんだなあ
- ぼくはモルモットさんのいいパパになってげん気になってほしいです
- こんどはわたしがお母さんだと思ってモルモットさんをたいせつにするね
- モルモットさんは6年生までずっといっしょ
- モルモットさんのことをもっと見て今まで気づかなかったことを見つけます
- モルモットさんが何をしたいのかすこしわかった気がします
- おむつをかえてくれてありがとう。わたしはモルモットさんのお世話をにこにこやってるけど、おかあさんはハラハラドキドキしていたんだね
- モルモットさんはぼくがせかいで1ばん大きくそだてます
- モルモットさんのうんちとるのたいへんだったけど、ママががんばってわたしのことやってくれたからわたしもがんばる

また、子どもたちが「だっこが上手になりたい」というおもいを持っていたときには、おうちの人に「どんな気持ちで、どんなふうになだっこしていたか」というお手紙を書いていただいた。

「うちの人が自分たちをだっこしているときの気持ち」

「うちの人が始めは上手ではなかったけれどだんだん自分のことをだっこすることが上手になったこと」

は、もしかしたら自分たちがチョコマシュをだっこしているときと同じかもしれない、ということに気づき始める。

以下はそのときの話し合いの様子である。

「はじめは、生まれてすぐのときは、あまりだっこしない方がいい。少し大きくなったらだっこが多い。」

「上の人がいるお母さんは、だっこに慣れていると思う。慣れていないお母さんは、始めはうまくないと思う。」

「幸せな気持ちだったと思う。」

「幸せな気持ちでだっこしていて、だっこの仕方はどうだっただろうね。始めから上手にできていたかな。うちの人は。」

「何回も繰り返して上手になったと思う。始めはそんなに上手でなくて、だんだん上手になったんだと思う。」

「ぼくもそう思うよ。」

「練習してできるようになったのかな。」

「まさか、もしかして、チョコとマシュと同じじゃない？」

「もしかして、ってどういうことかな？」

「はじめは上手でなくて、何回も繰り返して上手になりました。」

「だっこの仕方は違うと思います。」

「仕方は違うけど、やり方は同じ。」

「どういうこと？」

「だっこの仕方は違うけど、何回も繰り返してっていう、やり方は同じ。」

「苦労も同じじゃない？」

「がんばってやり方を覚えて、というのが同じだと思う。」

「何回もやることと苦労してやるのが同じ。」

## (5) 飼育活動を軸とした学びの広がり

### リアルな課題をみんなで話し合う

生きものはいのちあるものでかつリアルなものであり、予想し得ないタイミングで問題が起こる。問題が出てきたら、リアルタイムに解決のために行動しなければならない。教師が先に先に問題を見つけ提示するのではなく、子ども

自身が問題は何かととらえ考えなければ解決もできないだろう。そのためには、子どもがきれいごとではない本音をさらけ出すことで問題に直面していくと考える。

「モルモットさんのおとうさんおかあさんになる」という共通の目標を持つ仲間と本音をぶつけ合い、聞き合いながら知恵を出し行動する。教師は、子どもの観察する力・推察する力を引き出しながら話し合いを展開していく。

### 栽培活動への広がり

モルモットは野菜が好きである。そのことを知っている子どもたちが、冬に植えるのはチョコマシュが食べる野菜にしようという思いを持った。栽培活動にもつながる。

### ホームステイ～親もともに～

土日や夏休み冬休みなどの長期休暇には、可能なご家庭に預かってもらっている。学校でゆっくりふれ合えない子も、家でゆっくりとふれ合いを楽しんでいる。子どもが責任を持ってモルモットをお世話している姿、愛着をもって生きものにふれ合う姿を見て、親も子どもの成長を感じ、この学習を認めてくれている。また、兄弟姉妹や親も飼育を楽しむようになっていく。ホームステイの様子を親子でノートに記録していく。子どもの変容は親をも変容させていく。

### 日々の気づきや思いの交流

朝の会の健康観察、帰りの会のふり返りでは、チョコマシュについての気づきを交流し合う。話し合いでのルールや発言の仕方、考えのつなげ方などの言語活動にもつながる。また、普段の日記にもチョコマシュのことが出てくる。どんな出来事があっても、チョコマシュのことを思う、そういう大きな存在となっていく。

以下は日記より。

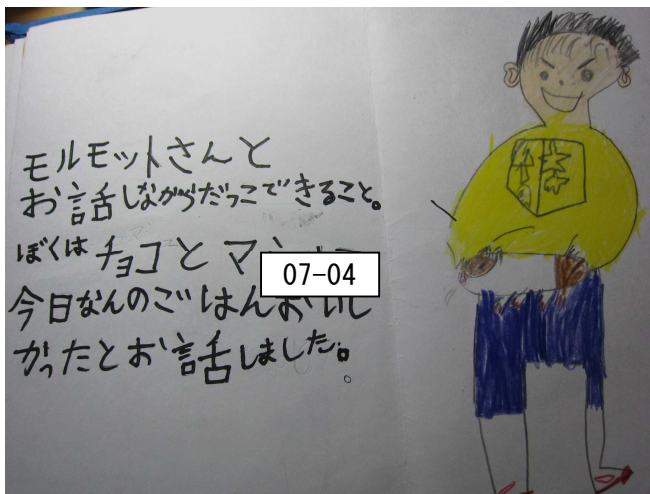
今日はおばあちゃんのたんじょう日でした。お母さんのお母さんです。わたしのお母さんはママです。チョコとマシュのお母さんは今どんな気もちかなあ、と思いました。さみしい気もちかな、と思いました。

チョコとマシュは一年中毛がぬける。あついときは何をしているのかな。冬みたいにくっついていていいのか、それともはなれているのかな。ホームステイは、かいてきかな。

今日はひなんくんれんがありました。地しんが来てひなんするとき、チョコマシュはどうすればいいかなと思いました。学校にとまる「かまぐらの生活」で一番楽しみにしているのは、夜チョコマシュを見られることです。

## (6) モルモットを育てる自分の成長に気づく

継続してモルモットとふれ合い愛着を持ち、おもいを高めてきたころ、モルモットとのかかわりによって生まれた成長した自分を表現することで、子どもたちに自信を持ってほしいと考えた。また、友だちから認められることでさらにその自信を大きなものにしてほしいと思い、自分の成長の気づきを交流し合う活動へとつなげていった。



## (7) 表現活動へのつながり

子どもたちが伝えたいことはたくさんある。それだけの体験をしてきた。育ててきたチョコマシユのことについて伝えたい、大変なことがあったというエピソードを伝えたい、ここまで育てることができた自分たちの自信を見せたい、さまざまである。国語科で取り組んできた群読劇ともつなげ、劇として表現する。グループによる劇作りは、子どもたちの考えのぶつかり合いがより多くなる。その分、それらをすりあわせてよりよいものを作っていくという経験もできる。困ったことが出てきたグループには全員

で寄り添い、解決していくことができた。全員で育てた体験があるからこそできる話し合いとなった。

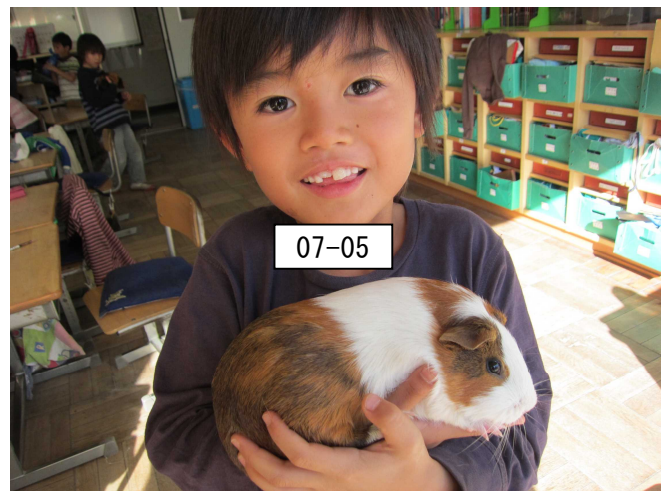
それぞれのグループが考えた表現方法は、歌、歌と踊り、人形劇、劇、チョコマシユが登場人物のお話、音読など、多様な方法が考えられ、グループの個性があふれるものになった。劇団名は「チョコとがんばりマシユ」になった。

### 3 おわりに

今日はおばあちゃんのたんじょう日でした。お母さんのお母さんです。わたしのお母さんはママです。チョコとマシユのお母さんは今どんな気もちかなあ、と思いました。さみしい気もちかなあ、と思いました。

この文章に、子どものモルモットへの大きな愛着を感じずにはいられない。育てているモルモットのみならず、その親へ思いをはせているのである。

飼育をし始めてからこれまで、モルモットへの愛着、自分への自信、生きものへの興味関心、友だちを認め合う雰囲気・・・などを少しずつ高めていくことができたと思う。ここに紹介しきれない子どもたちの姿も数え切れないほどある。継続して取り組むからこそその成果であると考えられる。しかし、継続して飼育をしているからといって自然と身につくというわけでもない。子どもたちの中で生きものへのおもいに温度差が出てきたときもあった。また、本学級では経験できなかったが、新しいいのちの誕生や死という経験もすることになる。子どもたちの学びが広がり深まっていくような手立てやその手立てをしかけるタイミングなどを考えることが大切だと思う。



(横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校)